193 吾廬能足矣　吾が廬は能く足りぬ
194 此地信終焉　此の地は信に終焉ならん
195 縱使魂思峴　縱使魂　峴を思ふとも
196 其如骨葬燕　骨の燕に葬らるるを其如せん
197 分知交糾纏　分は糾纏に交はるを知る
198 命詎質筵籌　命は詎ぞ筵籌に質さん
199 敍意千言裏　意を敍ぶ千言のうち
200 何人一可憐　何人か一に憐むべき

［構成論　総括］

以上二〇〇句を十句毎、「二十段」に分けながら構成を考察して来た。ここで総括をしてみる。この「敍意一百韻」は、五言二百句からなる排律という定型で構成され、しかも、全篇に亘り下平声「先」韻による一韻到底が貫かれている。又、全篇、奇数句と偶数句とが対をなすという徹底した構成の統一美が実践されていることにまず注目すべきである。そうした中で、句内容についても同様に、道真の意識的な構築がなされている。[注4] と考えた。一方、この句構成については既に先学によりさまざまな考え方が提起されて来ている。

筆者が全篇をあえて「均一」に「十句毎」に区分することを提起した大きな根拠は、八〇句「琴聲未改絃」の句のあとに、「已上十句、傷習俗不可移」の分注が見られる（一部の写本や刊本全本）点である。傍線を引いたようにこれを、十句を一まとまりのものとして構築していることを示唆する道真自身による分注と考えたからで